
おやつ

文歩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おやつ

【Nコード】

N1830R

【作者名】

文歩

【あらすじ】

ママはアナウンサー、
パパは新聞書く人、
あたし沙織は小学2年生。

本当にママとパパにはあたしが必要なの？
あたしには別にね必要ないかなって思うよ。
だってママもパパもおうちにいないんだもん。
だからいつそのことあたしは沙織をやめます。

おうち

「ただいま」

そう沙織は眩き赤いランドセルを投げ捨てる。

そして、テーブルに置かれてあるクッキーを頬張る。

クッキーはちよつと焦げてるけど、甘くておいしい。

クッキーを噛み砕く音が静寂を打ち消す。

時計に目をやると、2つの針は遠く離れた6と12を指していた。

パパとママ達みたい
と、沙織は思った。

テレビをつけると、ママがニュースを喋ってる。

ママと逢える貴重な時間。

夜ご飯を食べながらテレビ越しにママと逢う。

ママの声は聞こえるけど、あたしの声は届かない。

やっと2つの針が重なるときパパとママが帰って来る。

ママのほぅがマイナス2。

ママの声はカラスになる。

パパはすずめかな。

「沙織が…」

あたしのことを毎日煙らせるのはパパ。

沙織の成績

沙織の友達

沙織の先生

沙織の…

全部あたしの近辺。

あたし自身は丸裸。

ぴっかぴか。

洋服選んで着せてみて、髪の毛きれいにして…

沙織ちゃん人形のできあがり！

あとはにこにこ笑ってくれさえいいから笑ってみる。

あたしは…

何のために在るの？

あふれる

あたしは…

何のために在るの？

夢の中で沙織が叫ぶ。

そうしたら夢に雨が降ってきた。

両手の掌いっぱいに溜まった雨水を一気に飲み干すと、沙織は透明になった。

涙が、全身を覆う。

目が覚めると、頬が濡れていた。

おひさまは今日もにこにこ笑って憎い。

朝ご飯は家族みんなで食べる唯一のとき。

だがママもパパも笑わないしお喋りしない。

喋ってるのはテレビだけである。

テレビとお話しながら沙織は朝ご飯を食べ終わる。

「いってきます」

沙織の小さな声はテレビに打ち消された。

よりみち

学校へいくと、沙織の机がなかった。

いつものことのように沙織は廊下にある机を教室に運んだ。

「沙織ちゃん、おはよう」

声をかけたのは沙織の隣に座る優子だった。

「おはよう」

沙織は笑顔をつくった。

「どうして沙織ちゃんの机は毎日ろっかにあるのかなあ？」
優子が困った顔をする。

「たぶんあたしが悪い子だからだよ……」
沙織がうつむく。

「そんなことないよ！」
後ろから駿が沙織に言う。

「駿くん……」

沙織が駿を見ると、優子は沙織を睨んだ。

こんな１日にうんざりする沙織だったが、今日は午前授業だったため沙織はママに会える喜びと悲しさを歌いながら通学路を帰る。

「帰りたくないなあ…」
思わず口に出た沙織の言葉を、通りすぎたバイクの運転手が耳にした。

バイクは一度引き返し、沙織の元へ戻ってきた。

「ねえねえ、帰りたくないの？」
バイクを止め、沙織に話し掛ける。

「…」
沙織は黙って歩き続ける。
バイクから降りた男も一緒に隣を歩く。

しばらく２人は黙って歩き続けた。

「ねえ、誘拐していい？」
「え？」

男は沙織の返事を待たずに沙織にヘルメットを被せ、自分のうしろに乗せるとバイクを走らせた。

「自転車もまだ乗れないのに……」
沙織はうしろでそつと呟いた。

あつたかい

しばらくして同じ道を優子と数人の女子が通った。

優子の瞳は地面に落ちている帽子を映す。

「これ、あいつの…」

優子が呟いた。

その言葉に彼女達は足を止める。

「今日駿ちゃんと仲良かったよねー。優子ちゃんが駿くん好きなのねー」

彼女達が優子に言う。

優子は黙って視点を帽子から遠退け、再び歩き始めた。

優子の視点が空に向いたとき、信号待ちをしていた沙織も空を見ていた。

いま、誘拐されている沙織だが、そのゆうかいという言葉を理解で

きていなかった。

「ようかい…」

沙織の頭の中には鬼太郎が踊っていた。

だがようかいの中にバイクようかいなどいたかな、と回想していた。目がぐるぐるしそうなくらい猛スピードで走るバイクは、沙織の頭のぐるぐるを更に渦巻かせていく。

ただ、バイクようかい男にしがみついている沙織は懐かしさを感じているような気もした。

ようかいのおうち

バイクのぐるぐるは次第にゆっくりになり、やがて止まった。

バイクようかい男はバイクを降りると沙織をおんぶした。

「ようかいさん…」

沙織は小さな声で話し掛けた。

「あ、俺？そつかあ、俺はようかいに見えたか。まあ君を誘拐したくらいだからね」

男は嬉しそうに大口を開けて笑う。

「ゆうかい？」

沙織が首をかしげる。

「誘拐の意味知らないかな？」

男はそう言つとドアを開けた。

中には女が煙草をふかして立っていた。

沙織にはようかいけむり女に見えた。

「ハローマイベイベー！」

ようかいけむり女は沙織を見るなり微笑んで、男と沙織を同時に抱き締めた。

甘い葡萄の香りと、苦い煙が3人を包む。

「ようこそ伊藤家へ！あなたは今日から家族よ」

女は煙草をくわえたままそう言った。

「家族…？」

沙織には状況がわからなかった。

「おうちに帰りたくないんだろ？じゃあそんなおうち帰る必要なんてないよ。帰りたいうちに来ればいい。そう思って君を誘拐、さらったんだ」

男は笑顔を絶やさない。

沙織は呆然としたが、男の言葉に納得した。

この人達ならずっと一緒にいてくれるかもしれない、と。

「あたしは美夏。あなたのお母さんになるね！みーちゃんでもいいよ」
美夏は笑顔で言った。

「俺は千秋。ちあきって呼んでね。お父さんかあー」
千秋も沙織の隣で微笑む。

「あたしは…」

「小春ね」

美夏は沙織の発言を遮った。

「あなたがどんな名前か知らないけど、今日から伊藤家に来たんだもの。今日から小春ちゃんね」

美夏は長い髪を束ね直しながら言った。

「小春…」

沙織は少し複雑な気持ちもあったが、なぜかおうちにいるよりも安心した。

こはる

こうしてこはるの生活は始まった。

小春が朝の光に目を覚ますと、両脇には美夏と千秋がすやすやと眠っている。

ママとパパと一緒に寝たの最後いつだったっけ…

小春は嬉しくて笑ってしまった。

「小春…？もう起きたの？」

千秋は目を開かず呟いた。

「…だって学校に遅刻しちゃうもん」

小春が立ち上がるうとするとき美夏が小春の腕を掴んだ。

「…学校よりも家族みんなと一緒にいるほうが幸せだろ？」
美夏がにんまりと笑う。

小春はちよつと戸惑ったが美夏を見つめた。

「…そうだよね」

小春はゆっくりりまばたきをした。

「小春は今日何がしたい？」

千秋が優しい声で小春の心を撫でる。

「…何もしたいことない」

小春は下を向く。

「じゃああたしのしたいことをしちゃおう！」

美夏が布団をがばつとめくりあげる。

「まず今日はねえ、川沿いをお散歩してー川原でお弁当食べてー小春のお洋服買いにいってー夜ご飯はみんなでつくる！」

美夏が全身をにこにこさせる。

「お仕事ないの？」

にこにこを拾い集めたご飯を小春が食べながら尋ねた。

「…小春が最優先！」

美夏と千秋は少しの間黙って見つめ合い、小春を見てにっこりとした。

世界が小春を必要としてくれている、小春が世界の中心となってい

る、それだけで小春は幸せに染まっていた。

ママとパパはどの世界で生きているのかと疑問に思い、少し嫌悪した。

小春は、着実に小春へとなっていた。

きえる

夕方、こはるがあることに気付く。

「ここにはテレビがないんだねー」

にんじんの皮を剥きながらこはるが首をかしげる。

「こはる、俺らだけの世界にテレビが必要か？テレビっていうのはなあ、嘘しかつけねえんだぜ？」

千秋はこはるの目線までしゃがみこみ、こはるを見つめる。

こはるは千秋の瞳に吸い込まれてしまった。

「あたしたちはテレビを信じない。だからこはる、テレビは見ちゃだめよ」

美夏たちの言っている意味を理解できないこはるだったが、テレビを見てはいけないうことを理解することはできた。

ママに会えない、という思いも確かに心に泳いでいたが、美夏たちの言葉が飛び込み、それを流してしまった。

こはるはメディアから、そしてママから隔離された。

メディアのない生活なんて沙織の世界では考えられないものだった。

メディアがあるから社会が流れるように、メディアは沙織にとってママと会える場所、すなわち沙織の中では社会となる。

その社会は今や消えてしまい、新たな世界がこはるを包む。

そしてそれは幸せあふれる世界だ。

それならばなぜ人は、大人はメディアを必要とするのか。
家族がいるだけで社会は成り立つ。

メディアが嘘をつくるなら、それを信じてる人も嘘を共有する。
それってつまり社会は嘘？

ママも、パパもメディア。ママも、パパも嘘つき？

こはるの頭の中はぐちゃぐちゃし始めた。

だが、なぜだかこはるの心はママへ会いたい気持ち少しずつ波紋を描いていく。

あしあと

「こはる、今日は俺らの友達に会ったよ」

こはるの長い髪を結びながら千秋が言った。

こはるの名をもらって3日が経ち、初めて千秋と美夏以外の人間と会う。

「美夏さんは？」

「ちょっと用事済ませてくるって」

「そっかあ」

ピンポン

玄関のベルが鳴る。

「あつ、お客さん」

こはるが立ち上がろうとすると、千秋はこはるを隠すようにトイレへ連れていった。

「最近変な人が多いから、子どもは隠れてなさいっ」

千秋は笑顔でこはるの頭を撫でると玄関へ向かった。

だがこはるの好奇心も高まる。

ドアからそつと様子をつかがう。

「……」

「…知らねえ」

「…テレビ見てないのか」

千秋以外に2人の男の声が聞こえたが、何を話しているのかはこはるの耳まで届かなかった。

「いこっか」

千秋は笑顔でこはるを迎えに来たが、その笑顔の奥に焦りがあることをこはるは感じていた。

千秋はこはるの額に軽くキスをするとヘルメットを被せ、ようかい

バイクを走らせた。

久々に見る街並とようかいバイクの乗り心地にこはるは胸を躍らせた。

交差点に止まるとビルの大画面のテレビにこはるは目をやった。

なんと千秋が大きく映し出されている。

今は金髪をなびかせる千秋。

大画面にいるのは黒髪の千秋、だが顔つきは同じだった。

何と報道されているのかと目を細めると、バイクは大画面から大きく反れてしまった。

千秋は何も言わず走り続けた。

千秋くんて有名人なのかなあ？

こはるは不思議に思いながら風を吸い込んでいく。

流れる風景を見つめていたらバイクは止まった。

「着いたよー」

千秋は笑顔でこはるをバイクから降ろした。

ヘルメットを外したこはるは驚いて何度も瞬きをした。

「沙織のおうち…？」

あくとつ

「こはる、一緒に悪党を倒しにいくんだ」

千秋はにんまり笑うとこはるの手を握った。

だが行く手をこはるの足が阻んだ。

「どうした、こはる」

千秋が心配そうにこはるの顔を覗き込む。

「…千秋くんは沙織のこと知ってたの？」

こはるは実の名を久々に口にした。

千秋は言葉を見殺してこはるの手を引っ張り、玄関へ向かった。

こはるの頭は絵の具が溶け合うようにぐちゃぐちゃで混乱していた。

千秋がベルを鳴らすと、沙織のママが出た。

「…沙織！」

ママはいつもより疲れた顔で沙織の名を呼び、こはるに飛び付こうとした。

だが千秋がこはるをひょいと抱き上げる。

「…沙織を返さない！あなたは何者なの！？沙織に何してるの！？」

ママは血相を変えて怒っていた。

こんなにこわいママを見たことがない。

恐怖さえ感じてこはるは千秋のシャツをぎゅっと掴んだ。

「質問多いよー。こはる恐がってんじゃん。この通り、こいつは沙織じゃなくなったから。こはるっていうんだ。ご挨拶にと思ってね。こはる、ご挨拶しなさい」

千秋がゆっくりと話した。

「ママ…」

こはるの口から言葉が漏れた。

「何言ってるの？この子は沙織よ！？沙織、来なさい」

「お前らに沙織を育てる価値はない。マスコミの面してテレビで訴えかけたってそんなの同情でしかねえだろ？いいか、お前らのやってることは自己中心的でしかない。都合よくマスコミを利用してんじゃないえよ。お前らみたいな嘘つき共大嫌いなんだよ！」

千秋はママを睨み付けながら、怒るようにそう言い切った。

ママの目から涙がこぼれるのをこはるはただ見つめているしかなかった。

初めて見るママの涙はなんだか苦しそうだった。

「もう二度と沙織の名を呼ぶな！」

千秋はこはるを抱き抱えたまま後ろに振り向いた。

「沙織っ…さお…」

たくさんの涙と苦しみを抱えながらママが立ち尽くす。

どっちが悪党なのかなあ？

こはるはもやもやししながらなぜか苦しかった。

ママの涙が、なぜか嬉しいような気もした。

ママを背に、こはるを乗せてバイクは走りだした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1830r/>

おやつ

2011年10月8日19時16分発行